

コスチューム配色がもたらす立ち技格闘技選手のイメージ

—観客は、赤グローブに黒トランクスで格好良いのが好き？—

Spectators' Images regarding martial artists based on the colors of their costumes

林 美都子, 佐々木 基
Mitsuko Hayashi, Motoki Sasaki

北海道教育大学函館キャンパス
Hokkaido University of Education HAKODATE
hayashi.mitsuko@h.hokkyodai.ac.jp

Abstract

This study investigated the image of martial artists regarding the combination color of their costumes. At first, a scale of images regarding martial artists were constructed by collecting university students' evaluation. Factor analysis was performed on the data and three factors were found; identity of martial artists, gracefulness and winsomeness. Anova analysis showed that the combination with red gloves and black pants was the highest score in the identity of martial artists factor, that of blue and white was the highest in the gracefulness factor and both those of red and yellow, and of blue and yellow were the highest in the winsomeness. Another analysis regarding favorability rating revealed that spectators love three kinds of color combinations the best; red gloves and black pants, blue gloves and black pants and blue gloves and white pants.

Keywords — Color image, Costume color, martial artist

1. はじめに

茂田(2016)によると、2010年のK1ファイトマネー未払い発覚以降、日本国内における格闘技人気は低迷している。再び格闘技人気を盛り上げるためには、スター選手の登場が望まれるであろう。本研究では、立ち技格闘技のコスチューム配色に焦点を絞り、グローブの色とトランクス色の配色組み合わせが観客に与える格闘家イメージについて検討する。本研究の結果は、未来のスター選手がイメージ戦略の一環としてコスチューム配色を考慮する際の基礎的資料となろう。

また、研究対象を格闘家に絞り込んだ研究はあまりないが、高齢者の服装色にテーマを絞ったもの(庄山・栃原, 1999)などは散見され、色がもたらすイメージや、服装の色合いもしくはスポーツのユニフォームの配色がどのような感情イメージをもたらすかについての研究は、後述のとおり、これまでも行われている人気のテーマであり、色が人間の認知に与える影響を解き明かす上で重要な切り口の1つであると考えられる。本研究は、それらの研究に連なるものであり、格闘家

という限られた、かつ具体的な分野に絞り込むことで、過度に一般化され、抽象的に成りかねない色のイメージ研究に、具体的な方向と文脈を与えることも意図している。

仁科(2015)は、人気色とそのイメージに関して研究を行っている。その結果、人気の5色は、一位から順に、青、緑、赤、白、黒であることが示された。青には清らかで知的、落ち着いて美しいイメージ、緑には穏やかでリラックスでき、健康的なイメージ、赤には情熱的でやる気にあふれ、セクシーで強いイメージ、白には汚れがなく純粹、真面目で清潔なイメージ、黒には静かで重たく、なにものにも染まらない荘厳で力強いイメージがあることが報告されている。

井上・村本(2012)では、感情配色モデルとイメージ配色モデルに基づき、どのようなチームだという印象を与えたいか、どのようなプレイスタイルだというイメージを抱かせたいかなどに応じて、ユニフォーム配色を決定するシステムの作成を試みている。それによると、たとえば、赤、橙、黄色の組み合わせ、もしくはそれと白を組み合わせた場合は「喜び、楽しい、元気」といった感情語をもたらす、暗めの赤と紫、もしくは黒い赤と黒の組み合わせならば「怒り、厳しい」青などの寒色系、もしくはそれと黒の組み合わせならば「不安、悲しみ」、緑や黄色、もしくはそれらと青並びに白の組み合わせは「落ち着く、安らぎ」をもたらすというようにグループ分けを行っている。

立ち技格闘技のコスチュームは、一般財団法人日本ボクシングコミッションやNJKF公式ルール等により、一般にパンチンググローブ(本研究ではグローブと略)と膝上トランクス(本研究ではトランクスと表現)と規定されていることが多い。また、グローブについては赤か青とコーナーによって決められ、トランクスについては色が自由に選べる人が多い。

以上を踏まえ、本研究では、赤もしくは青のグロー

ブと、青、緑、赤、白、黒、黄色のいずれか人気上位7色(仁科、2015)のうちの1色のトランクス(6番目に人気のオレンジは、7番目に人気の黄色とイメージが類似していること、コスチュームとして印刷した場合両者の相違が分かりにくいこと、黄色の方がオレンジよりも「きけん」等格闘技との相性の良いイメージを持っていることなどから使用しなかった)との組み合わせで配色パターンを12種類作成し、コスチューム配色による格闘家イメージについて検証することとした。

なお、研究にあたって、適切な格闘家イメージ尺度がなかったことから、まずは当該尺度を作成するために予備調査を行い、本調査のデータを因子分析することとした。その後、コスチューム配色の検討を行う。

2. 予備調査

立ち技格闘技のコスチューム配色の検討を行う前に、配色によってもたらされる格闘家イメージに関して明らかにするため、新たに格闘家イメージ尺度の作成を行う。その際、当該尺度で用いる形容語を探索するため、スポーツ選手に関する雑誌アンケートを分析し、その結果を踏まえて形容語をピックアップした。

方法

評定者 KJ法様の分析は、大学生5名で行った。また形容語の選出は、格闘技観戦の趣味のある大学生4名で行った。いずれにおいても、そのうち1名は第二研究者であった。

分析対象 好きなスポーツ選手に関する市販の雑誌アンケートの選出理由や印象。具体的には、ORICON NEWS(2016)の「第9回スポーツ選手ランキング」並びにORICON NEWS(2017)の「第10回スポーツ選手ランキング」を用いた。

手続き まず、5名の評定者で、KJ法様の手続きでアンケート内容を分類した。その後、分類結果を踏まえて、格闘技観戦の趣味を持つ4名で、格闘家を表現するのにふさわしい形容語を各カテゴリーに4語ずつ、計12語選出した。

結果と考察

分類の結果、「実力」「外見」「内面」の3種類に分類された。「実力」に関しては、「記録に期待できそう」「メダルを狙える実力がある」など具体的に幅広い記述が多かった。やはり、スポーツ選手や格闘家などのアスリートは、当該競技に関する実力がもっとも好感度やイメージに影響する可能性が示唆された。しかしそれだけではなく、「人柄が良い」「明るい」などの選

手の「内面」に関する記述や「美しい」「カッコいい」など「外見」に関する記述もあった。

これらの分類結果を踏まえ、「外見」カテゴリーとして「カッコいい」「かわいい」「うつくしい」「さわやか」、「内面」カテゴリーとして「おもしろい」「ストイック」「優しい」「ビッグマウス」、「実力」カテゴリーとして「強い」「スピードがある」「テクニックがある」「スタミナがある」の各語を選出した。

3. 本調査

予備調査の結果を踏まえて作成した調査用紙を用いて大学生を対象に、立ち技格闘技のコスチューム配色に対する格闘家イメージを調べ、因子分析を行って格闘家イメージ尺度を作成する。その後、作成した尺度を用いて、コスチューム配色によるイメージを検証する。

方法

調査対象者 大学生284名を対象に調査用紙を配付した。回答に不備のあった3名を分析から除き、281名を分析対象とした。男性228名、女性53名(平均年齢20.17歳、SD1.17)であった。格闘技経験者31名、格闘技観戦経験者93名が含まれていた。全員色の識別には問題がないと自己申告があった。

刺激素材 図1に示したように、それぞれ配色の異なるグローブとトランクスを身に着けたファイター画像を用意した。顔や表情などはイメージに影響する恐れがあるため、ぼやけさせた。グローブの色は、試合で一般的に用いられる赤もしくは青のどちらかであった。トランクスは、赤、青、黄、緑、白、黒の6色のいずれかであった。背景色はグレーとし、暗い会場内でリングだけが照らし出されているプロの試合を想定した。全部で12種類あり、提示順に関してはそれぞれが一番最初と最後になるようカウンターバランスとランダムイズを行った。

画像の下には、先述の予備調査で求めた12の形容語を示し、それぞれ5段階で印象を評定するよう求めた。1が全くあてはまらない、5が非常によくあてはまるであった。なお、「ビッグマウス」については「大口をたたく」「物事をおおげさに言う」という意味であることを注釈した。

手続き 調査は、授業やサークルの集会などで集団法で実施した。目的を説明した後、回答例を示し、その後、12画像すべてについて、回答を求めた。所要時間はおよそ10分程度であった。

4. 分析 1: 格闘家イメージ尺度の作成

主因子法、プロマックス回転による因子分析の結果、固有値は 4.53, 1.86, 1.12, 0.73...と変化し、3 因子構造が妥当であると考えられた。回転前の 3 因子で 12 項目を説明する割合は 67.18%であった。

表 1 にその結果を示したが、第一因子は「強い」「スタミナがある」「テクニックがある」「ビッグマウス」「カッコいい」「スピードがある」の 7 項目から構成されており、格闘家としての実力に関連する項目を中心としてハタハリや格好良さも含んでいることから「格闘家らしさ」因子と命名した。第二因子は「さわやかさ」「美しさ」という上品な外見イメージの 2 項目であることから「優美さ」因子とした。第三因子は「おもしろい」「かわいい」「やさしい」の 3 項目であり、マイルドで親しみやすいイメージを構成していると考え「愛嬌」因子とした。

5. 分析 2: 配色別イメージの検討

格闘家イメージ尺度の各下位尺度について、配色別にその平均得点を分析した。「格闘家らしさ」について、配色別に分散分析を行ったところ、有意な差があった ($F(219, 2409)=87.92, p<.01$)。LSD 法による下位検定の結果、「赤グローブに黒トランクス」の得点が高かった。次いで「黒グローブに黒トランクス」や「赤グローブに赤トランクス」などの得点が高く、「青グローブに黄色トランクス」がもっとも得点が低かった ($MSe=.37, p<.05$)。

「優美さ」について配色別に分散分析を行ったところ、有意な差があった ($F(219, 2409)=50.99, p<.01$)。LSD 法による下位検定の結果、「青グローブに白トランクス」の得点が高かった ($MSe=.60, p<.05$)。

「愛嬌」について配色別に分散分析を行ったところ、有意な差があった ($F(219, 2409)=31.96, p<.01$)。LSD 法による下位検定の結果、「赤グローブに黄色トランクス」と「青グローブに黄色トランクス」の得点が高かった ($MSe=.60, p<.05$)。

6. 総合考察

本研究の結果、もっとも格闘家らしいコスチューム配色は「赤グローブに黒トランクス」であり、「青グローブに白トランクス」ならば優美な印象、「赤グローブに黄色トランクス」や「青グローブに黄色トランクス」であれば愛嬌のある格闘家タイプのイメージになることが示された。これらの色ならびに配色イメージは、

仁科(2015)や井上・村本(2012)の結果とも一致する。スポーツユニフォームの赤と黒の配色は怒りや厳しさの感情を喚起する(井上・村本, 2012)ため、格闘家の闘争心の象徴として、もっとも格闘家らしいイメージとなったものと推測される。一方、黄色と組み合わせると楽しさや元気さのイメージが生じるため、典型的格闘家からは外れ、愛嬌のある印象となったのであろう。またこれらの結果は、色や配色イメージに関する先行研究の結果は、格闘技コスチュームという狭い分野においてもほぼ適用可能であることを示しており、色をもたらしイメージにはある程度の普遍性や一般性があることを示唆するものと考えられよう。



図 1 調査に用いたファイター画像のサンプル

表 1 格闘家イメージ尺度に関する因子分析の結果
(主因子法、プロマックス、 $n=284$)

	第一因子 格闘家らしさ	第二因子 優美さ	第三因子 愛嬌
強い	0.87	-0.08	-0.94
スタミナがある	0.83	-0.16	0.09
テクニックがある	0.64	0.18	-0.07
カッコいい	0.62	-0.23	0.20
スピードがある	0.59	0.17	-0.12
ストイック	0.55	0.15	0.03
ビッグマウス	0.50	0.36	-0.14
さわやか	-0.11	0.85	0.04
美しい	0.03	0.67	0.13
おもしろい	0.07	-0.03	0.71
かわいい	-0.08	-0.16	0.55
優しい	0.10	0.35	0.39

主要参考文献

- [1] 井上博之・杉本善之, (2012) “感情配色モデルとイメージ感情モデルを用いた配色システムとユニフォーム配色の検討”, 日本感性工学誌, 11, pp. 273-280.
 - [2] 仁科恭徳, (2015) “若者世代の色彩感覚に関する調査”, 明治学院大学教養教育センター紀要, 9, pp. 55-62.
- ※本研究は、第二著者による平成 29 年度北海道教育大学卒業研究論文の一部を再分析・再編集したものである。